

まなづるとダアリヤ

宮沢賢治

青空文庫

くだものの畑の丘のいただきに、ひまはりぐらゐせいの高い、黄色なダアリヤの花が二本と、まだたけ高く、赤い大きな花をつけた一本のダアリヤの花がありました。

この赤いダアリヤは花の女王にならうと思つてゐました。

風が南からあばれて来て、木にも花にも大きな雨のつぶを叩きつけ、丘の小さな栗の木からさへ、青いいがや小枝をむしつてけたたましく笑つて行く中で、この立派な三木のダアリヤの花は、しづかにからだをゆすりながら、かへつていつもよりかゞやいて見えて居りました。

それから今度は北風又三郎が、今年はじめて笛のやうに青ぞらを叫んで過ぎた時、丘のふもとのやまならしの木はせはしくひらめき、果物畑の梨の実は落ちましたが、此のたけ高い三本のダアリヤは、ほんのわづか、きらびやかなわらひを揚げただけでした。

※

黄色な方の一本が、こゝろを南の青白い天末に投げながら、ひとりごとのやうに云った

のでした。

「お日さまは、今日はコバルト硝子ガラスの光のこなを、すこしよけいにお播まきなさるやうですわ。」

しみじみと友達の方を見ながら、もう一本の黄色なダアリヤが云ひました。

「あなたは今日はいつもとより、少し青ざめて見えるのよ。きつとあたしもさうだわ。」

「えゝ、さうよ。そしてまあ」赤いダアリヤに云ひました「あなたの今日のお立派なこと。あたしなんだかあなたが急に燃え出してしまふやうな気がするわ。」

赤いダアリヤの花は、青ぞらをながめて、日にかがやいて、かすかに笑って答へました。

「こればかりしぢや仕方ないわ。あたしの光でそこらが赤く燃えるやうにならないくらゐなら、まるでつまらないのよ。あたしもうほんたうに苛いら々してしまふわ。」

やがて太陽は落ち、黄水晶シトリンの薄明穹はくめいきゆうも沈み、星が光りそめ、空は青黝あをぐろい淵ふちになりました。

「ピートリリ、ピートリリ。」と鳴いて、その星あかりの下を、まなづるの黒い影がかけて行きました。

「まなづるさん。あたしずるぶんきれいでせう。」赤いダアリヤが云ひました。

「あゝきれいだよ。赤くってねえ。」

鳥は向ふの沼の方のくらやみに消えながらそこにつゝましく白く咲いてゐた一本の白いダアリヤに声ひくく叫びました。

「今ばんは。」

白いダアリヤはつゝましくわらつてゐました。

※

山山にパラフ^フの雲が白く^{よど}濺み、夜が明けました。黄色なダアリヤはびつくりして、叫びました。

「まあ、あなたの美しくなったこと。あなたのまはりは桃色の後光よ。」

「ほんたうよ。あなたのまはりは^{にじ}虹から赤い光だけ集めて来たやうよ。」

「あら、さう。だつてやつぱりつまらないわ。あたしあたしの光でそらを赤くしようと思つてゐるのよ。お日さまが、いつもより金粉をいくらかよけいに^ま撒いていらつしやるのよ。」

黄色な花は、どちらもだまって口をつぐみました。

その黄金きんいろのまひるについて、藍晶らんしょう石せきのさはやかな夜が参りました。

いちめんのきら星の下を、もじやもじやのまなづるがあわたゞしく飛んで過ぎました。

「まなづるさん。あたしかなり光つてゐない？」

「ずるぶん光つてゐますね。」

まなづるは、向ふのほのじろい霧の中に落ちて行きながらまた声ひくく白いダアリヤへ声をかけて行きました。

「今晚は。ご機嫌きげんはいかゞですか。」

※

星はめぐり、金星の終りの歌で、そらはすっかり銀色になり、夜があけました。日光は今朝はかゞやく琥珀こはくの波です。

「まあ、あなたの美しいこと。後光は昨日の五倍も大きくなってるわ。」

「ほんたうに眼もさめるやうなのよ。あの梨なしの木まであなたの光が行ってますわ。」

「えゝ、それはさうよ。だってつまらないわ。誰^{たれ}もまだあたしを女王さまだとは云はないんだから。」

そこで黄色なダアリヤは、さびしく顔を見合せて、それから西の群^{ぐん}青^{じゃう}の山脈にその大きな瞳^{ひとみ}を投げました。

かんばしくきらびやかな、秋の一日は暮れ、露は落ち星はめぐり、そしてあのまなづるが、三つの花の上の空をだまって飛んで過ぎました。

「まなづるさん。あたし今夜どう見えて？」

「さあ、大したもんですね。けれどももう大分くらいからな。」

まなづるはそして向ふの沼の岸を通つてあの白いダアリヤに云ひました。

「今晚は、いゝお晩ですね。」

※

夜があけかゝり、その桔梗^{ききやう}色の薄明の中で、黄色なダアリヤは、赤い花を一^{ちよつと}寸見ましたが、急に何か恐^{こは}さうに顔を見合せてしまつて、一ことも物を云ひませんでした。赤い

ダアリヤが叫びました。

「ほんたうにいらいらするってないわ。今朝はあたしはどんなに見えてゐるの。」
一つの黄色のダアリヤが、おづおづしながら云ひました。

「きつとまつ赤なんでせうね。だけどあたしには前のやうに赤く見えないわ。」
「どう見えるの。云つて下さい。どう見えるの。」

も一つの黄色なダアリヤが、もちもちしながら云ひました。

「あたしたちにだけさう見えるのよ。ね。氣にかけないで下さいね。あたしたちには何だかあなたに黒いぶちぶちができたやうに見えますわ。」

「あらっ。よして下さいよ。縁起でもないわ。」

太陽は一日かゞやきましたので、丘の苹果の半分はつやつや赤くなりました。

そして薄明が降り、黄昏くわうこんがこめ、それから夜が来しました。

まなづるが

「ピートリリ、ピートリリ。」と鳴いてそらを通りました。

「まなづるさん。今晚は、あたし見える?」

「さやう。むづかしいですね。」

まなづるはあわたゞしく沼の方へ飛んで行きながら白いダアリヤに云ひました。
「今晚は少しあたたかですね。」

※

夜があけはじめました。その青白い苹果の匂にほひのするうすあかりの中で、赤いダアリヤが云ひました。

「ね、あたし、今日はどんなに見えて。早く云つて下さいな。」

黄色なダアリヤは、いくら赤い花を見ようとしても、ふらふらしたうすぐろいものがあるだけでした。

「まだ夜があけないからわかりませんわ。」

赤いダアリヤはまるで泣きさうになりました。

「ほんたうを云つて下さい。ほんたうを云つて下さい。あなたがた私にかくしてゐるんでせう。黒いの。黒いの。」

「えゝ、黒いやうよ。だけどほんたうはよく見えませんわ。」

「あらつ。何だつてあたし赤に黒のぶちなんていやだわ。」

そのとき顔の黄いろに尖^{とが}つたせいの低い変な三角の帽子をかぶった人がポケットに手を入れてやつて来ました。そしてダアリヤの花を見て叫びました。

「あつこれだ。これがおれたちの親方の紋だ。」

そしてポキリと枝を折りました。赤いダアリヤはぐつたりとなつてその手のなかに入つて行きました。

「どこへいらつしやるのよ。どこへいらつしやるのよ。あたしにつかまつて下さいな。どこへいらつしやるのよ。」二つのダアリヤも、たまらずしくりあげながら叫びました。

遠くからかすかに赤いダアリヤの声がしました。

その声もはるかにはるかに遠くなり、今は丘のふもとのやまならしの梢^{こずえ}のさやぎにまぎれました。そして黄色なダアリヤの涙の中でギラギラの太陽はのぼりました。

青空文庫情報

底本：「新修宮沢賢治全集 第十一巻」筑摩書房

1979（昭和54）年11月15日初版第1刷発行

1983（昭和58）年12月20日初版第5刷発行

※底本は旧仮名ですが、拗促音は小書きされています。これにならない、ルビの拗促音も、小書きにしました。

入力：林 幸雄

校正：土屋隆

2008年2月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

まなづるとダアリヤ

宮沢賢治

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>